

## Citizen's approach and Citizen participation to Sustainable Development Goals

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-07-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 長岡, 素彦<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1048">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1048</a>        |

# SDGs 持続可能な開発目標へのアプローチと参画

Citizen's approach and Citizen participation to Sustainable Development Goals

長 岡 素 彦<sup>\*</sup>  
Motohiko NAGAOKA

本稿は、SDGs 持続可能な開発目標(以下、「SDGs」と略す)へのアプローチと参画について述べる。

SDGs には政府、企業など多様なアプローチがあるが、そのうち市民社会のアプローチと計画への参画について述べ、市民参画と学びによるマルチステークホルダープロセスによるサステナブルでグローバルな SDGs のソーシャルデザインについて語る。

まず、国内外で市民参画によってマルチステークホルダープロセスによる計画策定とはどのように行われてきたかについて語る。

次に、SDGs に先行して行われた SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の実例から SDGs・国内の計画への市民社会のアプローチと計画への参画のプロセスを述べる。

また、SDGs に対するアプローチはどのようなものかについて、そして、これらからサステナブルでグローバルな SDGs のソーシャルデザインを述べる。

尚、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の計画への市民社会のアプローチと参画については、岡山市域、北九州市域の関係者のヒアリングを行った。

## 1. マルチステークホルダープロセスによる計画策定

まず、SDGs のような国連等での国際的計画策定のマルチステークホルダープロセスがどのように行われてきたかである。

地球環境の悪化など国家単位での解決が難しく、政府だけでなく企業(多国籍企業)や市民でのマルチステークホルダーでの解決が必要になった。

また、科学技術の進歩によりインターネットなどの国境を越えたサイバースペースの問題や第 4 次産業革命(Industry 4.0)によるソサエティ 5.0(Society 5.0)の問題などでマルチステークホルダーの協議が必須となりつつある。

2003-06 年の WSIS 国連世界情報社会会議、2005-2014 年の DESD 持続可能な開発のための教育の 10 年、2015 年に決議された SDGs、2015 年の WCDRR 国連世界防災会議のなどでのマルチ セクター協働・地方自治体と CSO(Civil Society Organization)ネットワー

<sup>\*</sup> 武蔵野大学環境研究所客員研究員 一般社団法人 地域連携プラットフォーム 共同代表理事

クの協働などの特色をもったマルチステークホルダープロセスですすめられた。

次に、日本の自治体等での行政計画等策定のマルチステークホルダープロセスについてである。

前世紀の環境破壊（水俣など）、福祉に対応する市民運動や阪神淡路大震災から始まるCSOの動きが市民セクターの発言力を高め、これらの動きを受けて行政と市民の協働や企業と市民の協働のCSR(Corporate Social Responsibility)等でマルチステークホルダーの協議がすすんだ。

各地の都市計画、地域福祉計画、総合計画等、一部の再開発計画、大槌町の地区防災計画などで市民参画、住民参加のマルチステークホルダープロセスでの計画がすすめられた。

筆者も、埼玉県域で行政職員、企業、社協などの団体や地域と協働やCSRを進めてきた。

このように国内外で市民参画によるマルチステークホルダープロセスの計画策定が定着しつつある。

## 2. SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育と SDGs 持続可能な開発目標での国内の計画への市民社会の参画

ここでは SDGs・国内の計画への市民社会のアプローチと計画への参画として既実施のSDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育(図1)の計画実現プロセスを述べる。

このことによって、先行しているSDGs4・ESD 持続可能な開発を国内計画に取り入れた実例で市民社会のアプローチと計画への参画がどのようなものであったか、そして、その策定・実施プロセスがSDGs・国内の計画への市民社会のアプローチと計画への参画にどう関係するかについて述べたい。



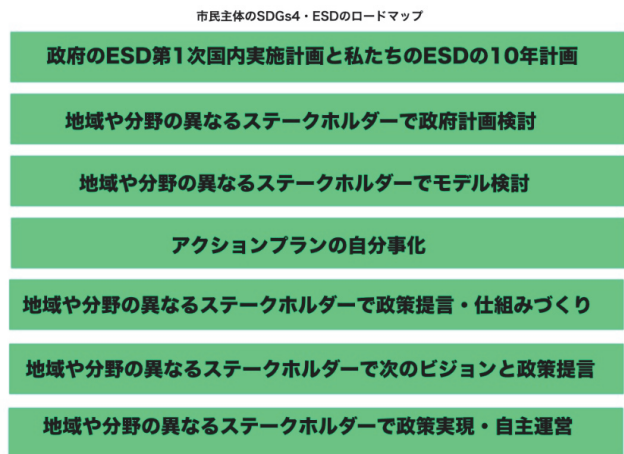
SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育は「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」(SDGs4-7)もので、2005年から国連DESD 持続可能な開発のための教育の10年のプログラムとして、先行して全世界で行われてきた。

SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のナショナルレベルの取り組みとして、2003年からの市民・ESDJ 持続可能な開発のための教育推進会議(以下、「ESDJ」と略す)は純民

間のナショナルセンターとして ESD 円卓会議などによるマルチステークホルダーによる政策の実現や DESD 持続可能な開発のための教育の 10 年の最終提言において政策を行い、政府の ESD 支援センターの実現などの政策実現・社会実装を行ってきた。[1]

まず、市民主体でバックキャスティングでの持続可能な開発のための教育のロードマップをつくり、政府の ESD 第 1 次国内実施計画だけでなく、ESDJ と地域や分野の異なるステークホルダーで政府計画と ESDJ の ESD の 10 年計画を検討した。次に、地域や分野の異なるステークホルダーでモデル検討し、アクションプログラム(行動計画・プロジェクト)の自分事化をはかった。(図 2)

そして、ESDJ と地域や分野の異なるステークホルダーの政策提言や「国連持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年円卓会議」(現在は、「持続可能な開発のための教育 (ESD) 円卓会議」)により、DESD 持続可能な開発のための教育の 10 年後の ESD の仕組や ESD 推進枠組「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」(ESD ー GAP)[2] を実現させた。



(図2)

(C)長岡素彦

次に、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のローカルレベルの取り組みとして、岡山市域と北九州市域で計画への市民社会のアプローチと計画への参画がどのように行われたのかについて述べたい。

地域での社会教育活動を基盤に、2005 年からの岡山市域の市民の地域での公民館を拠点とした地域課題解決の学びをサステナビリティ・SD 持続可能な開発と関係づけながらマルチステークホルダーで行ったものが、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の取組となった。

このような公民館における SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育としての教育・学びと活動が岡山市域での持続可能な地域づくり・SD 持続可能な開発のアクションプログラムとなった。

アクションプログラムとは、ビジョンを共有し、地域と世界で問題を発見し、目標を立て行動計画をつくり問題解決するプログラムである。

そして、岡山市域では SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のマルチステークホルダーでのビジョンづくり、条例化などを実現し、自治体政策への実装が行われた。

地域での女性の反公害活動を基盤に、2006 年に北九州市域の市民が SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のための北九州 ESD 協議会をつくり、2007 年には北九州市域での持続可能な地域づくり・SD 持続可能な開発の ESD アクションプログラムとして「北九

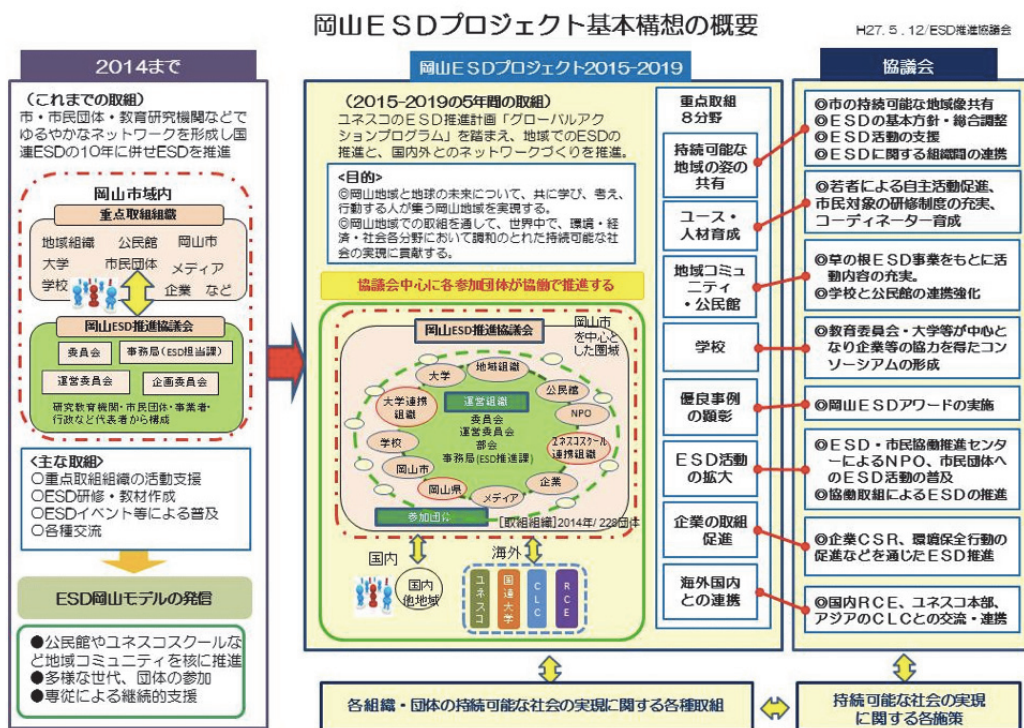
州 ESD アクションプラン」(第1次)を策定した。

このように市民活動における教育・学びが SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育となり、マルチステークホルダーでの ESD アクションプログラム(行動計画・プロジェクト)として行われた。

SDGs のナショナルレベルでは、政府の「SDGs アクションプラン 2018」[3]に対して SDGs 市民ネットワークの「SDGs ボトムアップ・アクションプラン 2018」[4]を SDGs 推進円卓会議で提示し協議した。

このようなアクションプランの提示と SDGs 推進円卓会議でのマルチステークホルダー協働は、既に 2005 年から「国連持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年円卓会議」(現在は「持続可能な開発のための教育 (ESD) 円卓会議」)による計画への参画として行われ、政策・制度に反映されている。

SDGs へのローカルレベルでの市民社会のアプローチと計画への参画は進行中であるが、岡山市域では SDGs への取り組みは SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の取り組みを基本としている。「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」(ESD・GAP)の開始を受けて 2015 年 4 月に ESD アクションプログラムとしての「岡山 ESD プロジェクト 2015-2019 基本構想」を制定し、岡山市域ではマルチステークホルダーで SDGs を共通言語にして行動や協働を促す仕組みができつつある。(図 3)

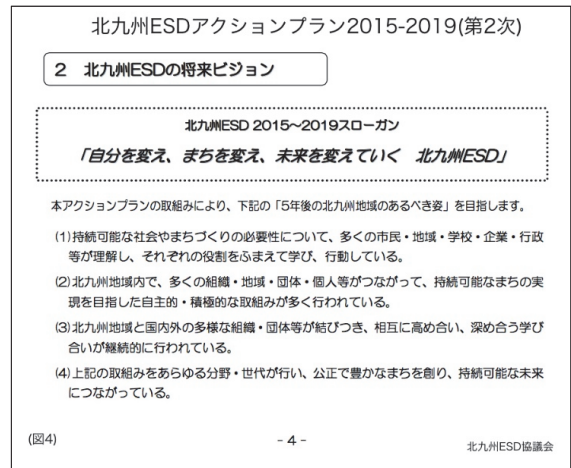


(図3)

(C)長岡素彦

北九州市域の SDGs への取り組みは SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育と連携を取りつつ行われている。「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」（ESD・GAP）の開始を受けて 2015 年 3 月にアクションプログラムとしての「北九州 ESD アクションプラン 2015-2019」（第 2 次）を制定し、マルチステークホルダーで SDGs を目指し、行動や協働を促す仕組みができつつある。（図 4）

また、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のための北九州 ESD 協議会は市民・大学・市とともに北九州まなびとステーションという地域拠点を設け、大学生が SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育として PBL 問題解決学習・プロジェクト学習（Project Based Learning・Problem Based Learning）を行っている。



このように SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育のナショナルレベルとローカルレベルの取り組みが、SDGs へのナショナルレベルとローカルレベルの市民社会のアプローチと計画への参画の基盤の一つとなっている。

また、岡山市域や北九州市域でのアクションプログラムは SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の新たな展開である「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」（ESD・GAP）とともに、SDGs の教育によって持続可能な地域と世界を実現するものとなっている。

### 3.SDGs 国連持続可能な開発目標に対するアプローチ

SDGs は、SD 持続可能な開発にもとづき、「誰一人取り残さない」という共生を基本に置いており [5]、その実施にはいくつかのアプローチが存在するが、ここでは科学技術イノベーションアプローチとソーシャルアプローチを取り上げる。

科学技術イノベーションアプローチとは、科学技術イノベーションを主な手段として優先課題により、主にトップダウンによってこれらの実施をはかるものである。

ソーシャルアプローチとは制度を主な手段として個別課題を、主にボトムアップによってこれらの実施をはかるものである。

日本政府の「SDGs アクションプラン 2018」では SDGs の推進を「破壊的イノベーションを通じた「Society 5.0」や「生産性革命」を実現」という科学技術イノベーションアプローチ [6]で行っている。

また、経団連はこれを支持し「企業行動憲章」の改定を行い、民間企業の SDGs の科学技術イノベーションアプローチの取組を推進している。

さて、ここでは科学技術イノベーションアプローチとは別の共生に基づいた共生サステナブルイノベーションアプローチについて述べたい。(図 5)

第 4 次産業革命(Industry 4.0)によるソサエティ 5.0(Society 5.0)の加速度的な進展と前世紀からの持ち越した貧困、気候変動などの持続不可能な諸課題はますます増大している。

持続不可能な諸課題に取り組む SD 持続可能な開発と第 4 次産業革命(Industry 4.0)によるソサエティ 5.0(Society 5.0)の科学技術イノベーションはともに必要なものである。

しかしながら、共生を基本としない科学技術イノベーションアプローチや旧来のソーシャルアプローチだけでは持続不可能な諸課題とソサエティ 5.0 に対応できない。特に、科学技術イノベーションアプローチの破壊的イノベーション(必要ではあるが)が、生活や社会に及ぼす負の影響を考慮して、社会的抑制が必要である。

また、このような優先課題をトップダウンによって実施するやり方は、SDGs のすすめ方を規定した SDGs 実施目標 17「パートナーシップでの目標を達成」から逸脱している。

ここで提案する SDGs への共生サステナブルイノベーション[7]とは、共生に基づいたサステナブルイノベーションを主な手段として分野横断的課題をマルチステークホルダーによってこれらの実施をはかるものである。

サステナブルイノベーション[8]とは、共生と持続可能な世界を目指して科学技術イノベーションやソーシャルイノベーションなどを包括するイノベーションである。

分野横断的課題とは、科学技術イノベーションアプローチの優先課題やソーシャルアプローチの個別課題とは異なり、問題解決を軸に分野横断的に解決をはかるものである。

国際的な地球環境の悪化など国家単位での解決が難しく、企業(多国籍企業)や市民とのマルチステークホルダーでの解決が必要になった状況ではトップダウン・ボトムアップを包括した多様な主体的主体の協働が必要である。

#### 4.サステナブルでグローバルな SDGs のソーシャルデザイン

これらの SDGs へのアプローチを前提にした SDGs のソーシャルデザインには以下の 2 つが考えられる。(図 6)

ひとつは、行政主導事業重点実施型 SDGs のソーシャルデザインであり、これは科学技術イノベーションアプローチの SDGs を行政主導型プロセスで、ビジョン

#### SDGsへのアプローチ



(図5)

(C)長岡素彦



(図6)

(C)長岡素彦

や合意形成ではなく、今までのフレームワークのままで制度に従って事業実施していくものである。

もうひとつは、マルチステークホルダー問題解決型 SDGs のソーシャルデザインであり、これは共生サステナブルイノベーションアプローチの SDGs をマルチステークホルダープロセスで問題解決をしていくものである。

ここでは、マルチステークホルダー問題解決型 SDGs を前提とした、SDGs のソーシャルデザイン[9]について述べる。

マルチステークホルダー問題解決型 SDGs のソーシャルデザインは、サステナブルでグローバルな社会をめざし、単に社会や制度のデザイン、社会実装にとどまらず、デザインを実現していく具体的な行動をする。また、デザインを特定のデザイナー(集団)がデザインするのではなくマルチステークホルダーでデザインするものである。

まず、SDGs のソーシャルデザインは、アクションプログラム(ビジョンと計画)をマルチガバナンスで行なう。このアクションプログラムは、ビジョンを共有し、地域と世界で問題を発、目標を立て行動計画をつくり問題解決するプログラムである。

次に、SDGs のソーシャルデザインは、SD 持続可能な開発の地域づくり・自治体づくりなどの制度化されたローカルガバナンスのデザインをマルチガバナンスで行う。それは制度化されたローカルガバナンスの SDGs への移行プロセスのデザインであり、具体的には SDGs の自治体の総合計画への実装と SD 持続可能な開発の地域づくりや地方自治体政策への SDG の実装である。[10]

実際に岡山市域では、公民館における地域発の教育・学びと活動が、アクションプログラム(ビジョンと計画)を形成し、それから条例制定や制度化など社会実装が行なわれた。

そして、SDGs のソーシャルデザインは SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育によって行われる。

SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育は、単に「教育」ではなく、地域問題の現場での学びを SD 持続可能な開発や SDGs と関係づけながら、PBL 問題解決学習・プロジェクト学習(Project Based Learning・Problem Based Learning)により問題解決を行うものである。

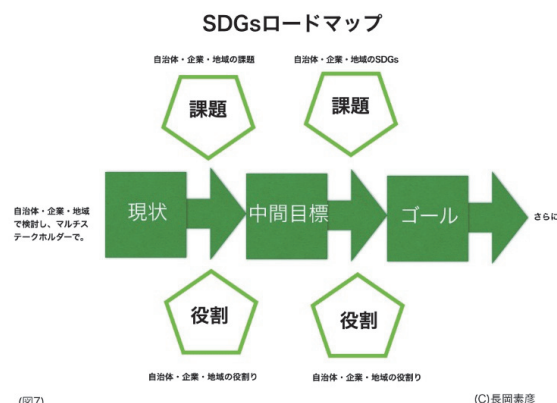
実際に北九州市域では「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム」(ESD・GAP)をもとに「北九州 ESD アクションプラン 2015-2019」(第2次)が制定された。

SDGs のソーシャルデザインのツールとして、SDGs ロードマップと ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)が考えられる。

SDGs ロードマップは、行政、企業、市民などの多様な担い手がプロセスと果たすべき役割を確認できる見取り図のことであり、マルチステークホルダーで協働をはかる仕組である。(図7)

この SDGs のロードマップを共有し、行政、企業、市民それぞれが個別のアクションプログラムとしてビジョンと計画をつくり実行し、さらに、マルチステークホルダーで統合的にビジョンと計画をつくり実施するものである。

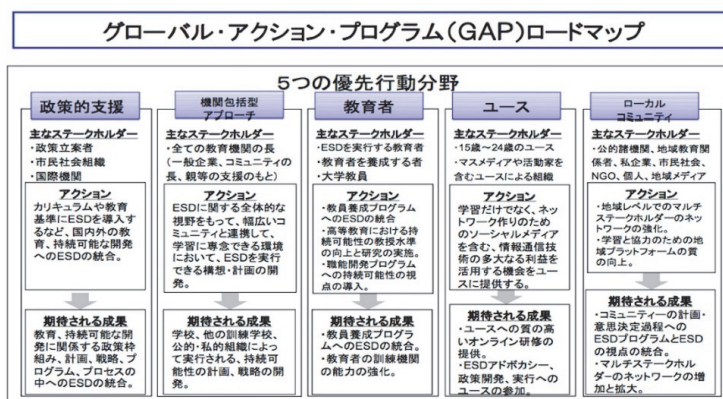
既実施の SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育において、ナショナルレベルでは ESDJ はロードマップによりビジョンと計画をつくり実行し、さらに、行政や企業とマルチステークホルダーで統合的に実施を試みた。また、ローカルレベルでは岡山市域や北九州市域でも同様な試みがなされた。



(図7)

(C)長岡素彦

ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)(図8)は、SDGs を教育で実現していく具体的な行動をビジョンと行動計画を備えた問題解決をプロジェクトとして実行する学びと活動[11]である。それは、行政、企業、市民それぞれが実行し、マルチステークホルダーで統合的に実施される。



(図8)

「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」

既実施の SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育において、岡山市域や北九州市域でも地域での多様なアクションプログラム(ビジョンと計画)の試みから ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)をつくり、実施する試みがなされた。

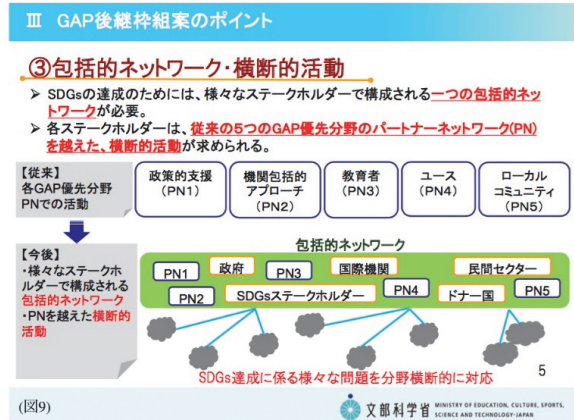
現在、次期の ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)である「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム 2030 : SDGs の達成に向けて (GAP2030)」[12]が検討されている。これは、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育の目的を「17のSDGsの達成を通じてより公正で持続可能な社会を作ることである(5.2)」とし、「ESDは、SDGs達成にとって批判的、構造的質問(critical and structural questions)を提起すること(5.5～5.7)」となっている。

つまり、SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育は、前述のように17のSDGsの達成を教育によって行い、単にSDGsのことを学習するのではなく、学びによって現状の問題を批判的、構造的に捉えて解決につなげるものである。

そして、このプログラムでは、ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)で実施されたGAPの5つの優先分野のパートナーシップネットワークを超えたマルチステーク

ホルダーの活動で SDGs の教育での実現をはかる仕組であり、このことで SDGs の分野横断的解決を行う。（図 9）

「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム 2030 : SDGs の達成に向けて（GAP2030）」は、SDGs ロードマップの基盤となり、両者が一体となって、SDGs を推進することが必要である。



## 5.SDGs 持続可能な開発目標へのアプローチと参画

20 世紀からの国内外で市民参画によるマルチステークホルダープロセスの計画策定をもとに、市民社会はこれら SDGs 持続可能な開発目標のアプローチと計画への参画をマルチステークホルダープロセスの市民参画と学びで行ってきた。

そして、市民社会はサステナブルでグローバルな SDGs のソーシャルデザインによって SDGs の実現をはかりつつある。

市民社会は SDGs の計画へのアプローチと参画を、ナショナルレベルでは SDGs のバックキャストのロードマップと政策実現の前例を市民の SDGs4・ESD の計画への参画のプロセスで築いた。また、市民社会はローカルレベルでは ESD としての教育・学びによる持続可能な地域づくりにもとづいた自治体政策への SDGs の実装の前例と市民の SDGs4・ESD 計画への参画のプロセスのひとつを築いた。

政府の「SDGs アクションプラン 2018」に対して SDGs 市民ネットワークは「SDGs ボトムアップ・アクションプラン 2018」を SDGs 推進円卓会議で提言したように、市民社会は社会や制度のデザイン、社会実装を提言している。このようなプロセスで市民社会はマルチステークホルダーで SDGs の構想、実現をはかっている。

そして、SDGs 政策だけでなく、SDGs を実現していく具体的な行動として、地域課題に向き合い、マルチステークホルダーで地域の問題解決を行うマルチガバナンスで行なっている。

さらに、市民社会は、SDGs の実現を SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育によって行っている。SDGs4・ESD 持続可能な開発のための教育は、SDGs を教育で実現していく具体的な行動をビジョンと行動計画を備えた問題解決をプロジェクトとして実行する学びと活動となっている。

これらをもとに、市民社会はマルチステークホルダー問題解決型 SDGs を前提とした

SDGs のソーシャルデザインで SDGs を推進している。

SDGs のソーシャルデザインのツールとして、SDGs ロードマップと ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)などが考えられる。

SDGs のロードマップは行政、企業、市民それぞれが個別に、また、協働して SDGs を推進するための見取り図である。

ESD グローバルアクションプログラム(ESD・GAP)、及び、「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム 2030 : SDGs の達成に向けて (GAP2030)」は、既存のパートナーシップネットワークを超えたマルチステークホルダーでの教育による 17 の SDGs の達成を行う仕組みである。

さて、繰り返しになるが、SDGs の科学技術イノベーションアプローチや旧来のソーシャルアプローチだけでは持続不可能な諸課題とソサエティ 5.0 に対応できない。

また、優先課題をトップダウンによって実施するような SDGs の推進は、SDGs のすすめ方を規定した SDGs の実施目標 17「パートナーシップでの目標を達成」から逸脱している。

今後は、このような科学技術イノベーションアプローチの SDGs の行政主導型プロセスを、市民主体の共生サステナブルイノベーションアプローチで再方向づけ、さらにマルチステークホルダー問題解決型の SDGs のソーシャルデザインで、これらを再デザインすることが必要である。

註

[1]長岡素彦、他(2016)「市民社会からの挑戦—ESD 推進 12 年間の軌跡」持続可能な開発のための教育推進会議

[2]「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」（翻訳）日本ユネスコ国内委員会

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1345280.htm>

[3]「SDGs アクションプラン 2018-2019 年 ー日本の「SDGs モデル」の発信を目指してー」持続可能な開発目標（SDGs）推進本部 2017 年 12 月 16 日  
（「SDGs アクションプラン 2019」）2018 年 12 月発表）

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/>

[4]「SDGs ボトムアップ・アクションプラン 2018」（第 1 次提出分最終版・2018 年 5 月 30 日 SDGs 推進円卓会議用）一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク 2018 年 5 月 30 日  
[https://docs.wixstatic.com/ugd/bde02c\\_070e37dd72ec452088e68703d1bf38ce.pdf](https://docs.wixstatic.com/ugd/bde02c_070e37dd72ec452088e68703d1bf38ce.pdf)

[5]長岡素彦(2018)「SDGs・持続可能な共生をすすめる ESD・地域連携教育」共生科学 第 9 巻 34-43 頁

[6]長岡素彦(2018)「持続可能な地域づくりの方法としての SDGs・ESD」未来の学びと持続可能な開発・発展研究会大会発表

[7]長岡素彦(2018)「SDGs 持続可能な開発計画と SF 国連仙台防災枠組みへの共生アプローチ」日本共生科学会第 10 回大会発表

[8]長岡素彦(2016)「共生を築くイノベーション ESD・ESD と復興 2」日本共生科学会第 8 回大会発表

[9]長岡素彦(2018)「サステナブルでグローバルな地域デザイン ーローカルガバナンスにとつての SDGs・ESD」地域デザイン学会第 4 回ローカルガバナンスフォーラム発表

[10]長岡素彦(2018)「SDGs・国内計画への市民参画:既実施の SDGs4・ESD のマルチステークホルダーの取り組みから」日本計画行政学会第 41 回大会発表

[11]長岡素彦(2009)「学び合い、つながる ESD 持続可能な開発のための教育」日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 14 巻 49. 58 頁

[12]ユネスコ(2009)「ESD の将来的展開に関するユネスコ・ポジションペーパー」

[https://en.unesco.org/sites/default/files/](https://en.unesco.org/sites/default/files/unesco_position_paper_on_the_future_of_esd_280918.pdf)

[unesco\\_position\\_paper\\_on\\_the\\_future\\_of\\_esd\\_280918.pdf](https://en.unesco.org/sites/default/files/unesco_position_paper_on_the_future_of_esd_280918.pdf)

## 参考文献

長岡素彦(2015)「福島での教育復興と持続可能な復興と発展を目指す『ふるさと未来創造 ESD』・これまでの ESD と本プロジェクトの意義」ユネスコ ESD 福島ニュース No.14. 6 頁

長岡素彦(2013)「ESD と復興 震災体験をいかした未来をつくる教育・ESD」関係性の教育学 Vol. 13 No. 1 77. 82 頁

## 参考

サステナブルフューチャー

<http://www.sustainablefuture.jp>